

氏名（本籍）	平沼 公子（北海道）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 6765 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	Of Human Bonding: Bondage, Freedom, and Narrative of Love in Contemporary African American Novels

主査	筑波大学教授	博士（文学）	宮本 陽一郎
副査	筑波大学教授	文学博士	鷺津 浩子
副査	筑波大学教授	Ph.D.（アメリカ文学）	竹谷 悦子
副査	関西大学准教授	Ph.D.（文学）	ラファエル・ロンベール

論文の要旨

アイデンティティーの政治学の限界がさまざまなかたちで取りざたされるなかで、1990年代以降のアフリカ系アメリカ文学は、岐路に立つことになった。「人種」という概念が文化的な構築物に過ぎないという前提に立つとき、「人種」というアイデンティティーに依拠した「アフリカ系アメリカ文学」というジャンル規定は、どのようなかたちで存続しうるのか？ また作家の人種的アイデンティティーから離れて、なおかつ「アフリカ系アメリカ文学」を定義することが可能なのか？ こうした疑問は、アフリカ系アメリカ人作家のみならず、これを研究する批評家にとっても、回避することのできない問いとなった。

本論文は、「人種」というナラティヴによって過剰決定されることを免れえないアフリカ系アメリカ人作家の小説のなかに、これを超克しようとするナラティヴ—愛のナラティヴ—が伏在することを解明し、これを通じてアフリカ系アメリカ文学研究に新たなパラダイムを提起するものである。恋愛は、アフリカ系アメリカ文学において、常に人種混淆、パッシング、黒人男性性／黒人女性性などの表象として読み換えられることを宿命づけられてきた。そのように読み解かれるとき、アフリカ系アメリカ文学における恋愛は、「人種」という解釈コードに回収されることを免れない。本論文が試みるのは、アフリカ系アメリカ文学における恋愛の表象を、そうした過剰決定そのものへの抵抗として位置づけることである。

第1章「人種アイデンティティーの未解決事件—ウォルター・モズリーの探偵小説におけるアイデンティティー政治学の（不）可能性（Unsolved Mystery of Racial Identity: Walter Mosley's Detective Fiction and (Im)possibilities of Identity Politics）」は、ウォルター・モズリーのハードボイルド探偵小説『青いドレスの悪魔（Devil in a Blue Dress）』の分析を通じ、アフリカ系アメリカ文学における「愛のナラティヴ」を浮き彫りにする。解釈学的な眼差しに支配された探偵小説というジャンルを転用しつつ、モズリーはそこにヒロインのパッシングをはじめとする人種的な主題を書き込んでいるかのように見える。しかし、主人公である私立探偵イージー・ローリンズにとって、事件は唯一の真相に回収されることのない未解決事件であることをやめず、また彼の恋人であるダフニの人種的アイデンティティーも確定されることはない。主人公とダフニのあいだの恋愛は、「（白い）ハードボイルドの黒い転用」という先行研究の解釈パラダイムそのものを覆す、「愛の

ナラティブ」である。

モズリーの作品が、人種混淆とパッシングの歴史（ヒストリー）／謎（ミステリー）を解決するのではなく、むしろその解明できない複雑さ、答えが見つからない困難さを体現するテキストであるならば、第2章「愛は可能か？—オクタヴィア・E・バトラーにみる人種混淆、寛容、生殖（Is Love Possible?: Miscegenation, Tolerance, and Reproduction in Octavia E. Butler）」で扱うオクタヴィア・E・バトラーのSF小説は、それを解決しようとする営みの暴力性を告発するものである。黒人であり女性でありSF作家であるバトラーの小説『キンドレッド（Kindred）』（1979年）と短編集『ブラッドチャイルドおよびその他の短編（Bloodchild and Other Stories）』（1996年）は、愛と生殖という主題を通じアフリカ系アメリカ文学批評の用語では定義できない恋愛関係を描く。

第3章「快楽と苦痛—ゲイル・ジョーンズとブルース・ナラティブ再考（Pleasure and Pain: Gayl Jones and the Blues Narrative Revisited）」は、その衝撃的な性描写と暴力描写や、精神的に不安定なナレーターの多用などから、先行研究においてブラック・フェミニズムの文学としてカテゴライズされる傾向にあったゲイル・ジョーンズの小説『コレヒドローラ（Corregidora）』（1975年）を取り上げ、ブラック・フェミニズムの文学としての読解からすり抜ける要素に注目する。ジョーンズの作品にあっては、性と暴力が奴隷制の寓意であるのみならず、それを越えた二人の人間のあいだの存在論的な絆となりえている。

そして第4章「ブラック・アメリカン・ナラティブの結末—チャールズ・ジョンソンの『中間航路』における「囚われ」と「解放」（“The End of the Black American Narrative”: Bondage and Freedom in Charles Johnson’s *Middle Passage*）」では、チャールズ・ジョンソンの「新・奴隷体験記」（Neo-Slave Narrative）を論じる。「新・奴隷体験記」は、19世紀の「奴隷体験記」の語り直しを通じ、公民権運動以降のアフリカ系アメリカ人作家たちが新たなアイデンティティを獲得するためのジャンルとして注目された。「奴隷体験記」を特徴付ける「囚われ」と「解放」という主題の意味は、きわだって間テクスト的な『中間航路』のなかで、浮遊し変容を遂げて、人種の歴史との和解に、そして主人公と妻の間主体的（intersubjective）な絆に到達する。

第5章「囚われから涅槃へ—『牧牛の物語』における愛の降伏（From Bondage to Nirvana: Love and Forgiveness in *Oxherding Tale*）」では、ジョンソンの『牧牛物語（Oxherding Tale）』（1982年）が、奴隷体験記という原型を最終的に解体し、アフリカ系アメリカ文学の原型を探求すること自体を疑問に付するテキストであることを明らかにする。それとともに、『牧牛物語』は、19世紀の奴隷体験記の主題を更新し、許し難きものを許すことのみを通じて到達される「自由」と「愛」を垣間みる物語—愛のナラティブ—になりえている。

結章では、ジャック・デリダの赦しに関する論考（“Century and the Pardon”）とスラヴォイ・ジジエクの寛容さをめぐる論考（“Tolerance as an Ideological Category”）を踏まえつつ、20世紀末から21世紀へのアフリカ系アメリカ文学は、19世紀的な意味での「普遍性」に安易に遡及することなく、アイデンティティ・ポリティクスの限界を克服し、言葉では語りえないものとしての「愛」を探求する文学であると結論づける。

審査の要旨

1 批評

本論文は、ポスト公民権運動時代のアフリカ系アメリカ文学を読み解くための新たな視座を提起する、画期的な論考である。本論文は、現代アフリカ系アメリカ人作家の諸作を分析するのみならず、それらを論じた文学批評も分析対象とした、いわば二重の読解を試みている点において、きわめて斬新で野心的な立論となっている。著者は、単に現代アフリカ系アメリカ文学について一貫したテーマにより論述するのみならず、現代アフリカ系アメリカ文学研究そのものに内在する問題に果敢に取り組み、説得力ある理論枠を提示している。アイデンティティー・ポリティクスへの回収に対抗する言説として、現代アフリカ系アメリカ人作家のテキストに伏在する「愛のナラティブ」を同定する議論は、高い評価に値する。

これは、現代アフリカ系アメリカ文学論として最先端に立つ問題設定であるのみならず、アイデンティティー・ポリティクス以降の文学批評という、より大きな理論課題にも新たな光を投じるものでもある。ポスト・エスニック文学論としても、高い学術的価値を認めうる。本論文は、人種・エスニシティー・ジェンダーといったアイデンティティー・ポリティクスの呪縛を超えた今後の文学研究の在り方についての、強い問題意識に貫かれた議論を展開している。

大胆な理論構築が、入念な作品分析と論述に支えられている点もまたこの論文の優れた特質である。分析対象とする作品の選択は秀逸であり、大胆な仮説をしっかりと支えている。かつ全体的な理論枠組みが、それぞれの作品の核心を見事にあぶり出している点は、本論文の大きな成果といえる。とりわけチャールズ・ジョンソンを論じた第4章と第5章は、きわめて高い完成度を示している。作品分析については、英語による論述も的確である。

壮大な企図をもつ論文であるだけに、さらに望むべき点もある。分析対象とする作品の選択は、全体としての議論を支える点ではきわめて有効になされているが、まさにそれゆえに恣意的な選択という印象も与えかねない。主な分析対象とした四人以外のアフリカ系アメリカ人作家を視野に入れた研究は、今後望まれるところである。トニ・モリソンを論じることは、この研究にさらなる説得性を与えるために、とくに求められるところである。

英語による論述は、作品分析に関しては十分な水準に達していると判断されるが、理論的な構築を試みる部分においては、大胆な立論をまだ十全に支えきれていない部分も散見される。

以上のような問題点は、本論文の画期的な意義を減ずるものではなく、むしろそれゆえに期待される課題である。

2 最終試験

平成26年1月18日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。